

南青協便り 第 229 号



南米産業開発青年隊協会会報

2024 年 10 月 10 日発行

Boletim n.229 Seinentai do Brasil : Edição 10 de outubro de 2024



9 月 1 5 日、円光寺で開催した慰霊祭の参列者一同
2 世・3 世(お孫さん)も含め 4 3 名の参列者で盛会でした
5 ページに参列者ほぼ全員の写真がありますので、ご覧になってください

Vejam a foto de quase todos dos participantes na página 5

目次(第 229 号) ÍNDICE(n.229)

表紙：9月15日、円光寺で開催した慰霊祭の参列者一同	1
一、Índice 目次	2
一、慰霊祭が行われました	会長 渡辺進 3
一、慰霊祭の写真です	サンパウロ 4期 曾我義成	...4~5
一、今年の慰霊祭	サンパウロ 8期 長田譽歳	... 6~7
一、慰霊碑清掃作業、桜と円光寺	ソロカーバ 8期 早川量道	... 8~9
一、会計報告(6、7、8月分)	サンパウロ 8期 長田譽歳 10
一、一人の先輩が亡くなりました	サンパウロ 単独 渡辺 進	.. 11~12
一、詩を作りました	ポルトガル 10期 岡井よししげ 13
一、自分史(49)	ポルトガル 10期 岡井よししげ	... 14~18
一、屁こきの夫婦	ポルトガル 10期 岡井よししげ 19~21
一、最高裁の独善と腐敗	サンパウロ 9期 貝田定夫 22~24
一、人のよりどころとなるものとは	同窓会長 鈴木浩明	... 25~28
一、インドネシアに行って来ました	同窓会長 鈴木浩明	... 29~32
一、コロナ禍は去ったけれど	フォス・ド・イグアスー 齋藤信夫	... 33~34
一、トルコ共和国のことなど	ジュンジアイ 9期 荒木昭次郎	... 35~37
一、石井家の人達	ジュンジアイ 9期 荒木昭次郎	... 38~40
一、橋口陽介幹部の葬儀に出席して	同窓会長 鈴木浩明	...41~43
一、残り僅かな人生	サンパウロ 8期 長田譽歳	...44~49
【備考】1982年にイタイプ発電所ダムが出来たために水没し、見られ なくなったセッチ・ケーダスの滝(Salto de Sete Quedas)の写真です		
一、我が家の庭の花	フォス・ド・イグアスー 齋藤信夫	...50~51
一、【編集委員】【次号予定、お願い】【お知らせ】【編集後記】	52

【訃報】小沢順氏(単独 308 番) 7月26日に逝去されました。

ご冥福をお祈り申し上げます。

【お知らせ】荒木昭次郎さんの新住所とメールアドレスを最終ページで
見てください。



慰霊祭が行われました

会長 渡辺進

9月15日(日曜日)円光寺において2024年慰霊祭が行われました。先輩方(曾我さん、長田さん、早川さん)のリーダーシップにより、2世と3世の皆さんを含めて43人の参加になり、とても賑やかな慰霊祭になりました。

お坊さんの「読経」では、亡くなられた仲間の名前を1人1人読み上げてもらい、それを聴きながら懐かしく先輩方の顔を思い出すことができました。

奥様がた、子供たち、お孫さんまでご焼香して、とても厳かに行われました。亡くなった先輩方は仲間や奥様だけではなく、子と孫まで来てくれお線香をあげてもらったので、とても喜んでいると思います。慰霊碑の前で記念写真を撮り無事供養は終了しました。

その後、奥様方の自慢の料理をお腹いっぱいいただきました。お寿司あり、おにぎりあり、梅干し、紅ショウガ、焼き鳥、焼き魚など、とても思い出しきれません。こんな料理上手な奥様と結婚出来てなんと幸せな先輩方でしょう。とっとうらやましく思います。

慰霊祭後の親睦会では会員家族の2、3世どうしが大変楽しく、愉快地時間の経つのも忘れて語り合い、そして別れを惜しんでおりました。

これからも2、3世の皆さんが親父達の歴史を忘れないためにも、この慰霊祭を継続してくれると感じた次第です。

そんなこんなで、老若男女で本当に楽しいひと時を過ごしました。14時過ぎに青年隊らしく、後かたづけと掃除をしっかりと解散しました。

皆さんの子供(とは言っても40歳から50歳の立派な大人ですが)に円光寺までの送り迎えから荷物運び、後片付け、掃除まで本当にお世話になりました。手助けがないといろいろ難しい歳になりました。感謝です。これからも家族といっしょに慰霊祭を継続していきましょう。



慰霊祭の写真です 表紙と次頁を含め合計4枚です

サンパウロ 4期 曾我義成



読経中の僧侶（上）と慰霊碑でのご焼香（下）



参列者ほぼ全員の写真です Quase todos dos participantes



今年の慰霊祭

サンパウロ 8期 長田譽歳

慰霊祭の9月15日、その一日前までは夏模様の天気でしたが、当日は一日中曇り空で少し寒い位でしたが雨も降らず、まあまあの天気でした。今年の慰霊祭は今迄で一番多い人数で40数人が参加され立派慰霊祭でした。今迄一度も来た事の無い家族が何人か出席されました。これは一重に曾我氏が丹念に電話して呼び集めたから、あんなに沢山の人が集まりました。

本来の日本から来た青年隊員は曾我氏、菊地氏、早川氏、荒木氏、渡辺進氏と私の6人でしたが、亡くなった青年隊員の夫人が、その子供と孫を連れて沢山の人が家族で出席されました。

法要の続経では今迄亡くなった人全員の名前を読み上げて頂き感動し、終わった時には拍手を送りました。道半ばで亡くなった人も有りますが、皆が立派に青年隊員として、長沢師の志を貫き南米の地に産業開発青年隊有りとは十分な足跡を残されました。青年隊二世はその我々の功績を十分に汲み取り立派に成長され、親以上に逞しく生きておられると感じました。

当日出席された菊地義治氏は援護協会の会長を務めました。今は日系コロニアの最高機関は援護協会です。早川氏も福会長を務めました。

南青協は少ない人数の小団体ですが、今も健在です。昨日集った二世もブラジル社会で皆立派に活躍しています。私達青年隊一世は皆残り僅かな人生となってしまいましたが、今考え思い返してブラジルへの移民は決して間違っただけではなかったと考へます。我々の二世がブラジル社会で十分な活躍を見るにつけ、間違いではなかったと思ひます。

私の三女の夫は連邦大学の大学院の先生です。その家系は三代続いた医者の家系です。暮のナタールと新年の元旦はその父母と弟の医者家族は私の家に来て祝います。日本にいたら私の家族と三代続いた医者家族と対等な付き合いは不可能だろうと思ひます。

私の三女は社会科学学会の世界大会が東京港区虎の門の東京大学で開催された折、シンポジウム講演をしました。こんな事は若し日本に住んでいたら到底考えられません。

慰霊祭の食事の折菊地さんと渡辺進さんと私と三人並んで話した時、三人共心臓欠陥が有る話をしました。この不整脈の心臓病は如何に維持して長引かせるかが問題であって全治するのは不可能だと私は思いました。

菊地さんと渡辺さんの話を聞いて、似ている点も有りますが、少し症状が違ふと思われました。不整脈には幾つかのタイプが有ると思いました。

私の場合は特に寒い日のシャワーの後に症状が出ます。今年の寒さはもう終わりですので、問題は来年の冬に備えます。

来年の5月中旬に次女と三女夫婦と私夫婦6人で日本に旅行する計画ですが一月の終わりにチケットを買う段階で、私の体調が良かったなら行くことにします。何とかして最後の日本旅行をするつもりです。

私の女房の父親は93歳で亡くなりました。その数日前に荷物整理をして居た女房が厚紙の袋に入った用紙を開けると、何と大正8年の横浜市吉田小学校の卒業証書が出てきました。墨で書かれた卒業証書は90年過ぎた今もはっきり読めます。私はあれほど古い書を見た事はありません。

その女房の父親は亡くなる10日程前に具合が悪くなり、息子である長男に話すと、彼は直ぐ病院に連れて行き入院させましたが、10程入院して亡くなりました。その日の早朝、私の女房と妹と弟の3人でサンパウロより500キロ離れた町の直ぐ近くに到着した時に携帯電話が鳴り、介護していた兄嫁から少し前に亡くなったと言われる。

私は周到な死に方だったと思う。義父は移民としたら成功しなかったけれど、最後の締め括りは立派でした。私は女房と2人で健康保険を払っています。最後はいかんとしたら是非病院に行こうと思います。

病院で最後を迎えるのが宜しいかと思ひます。



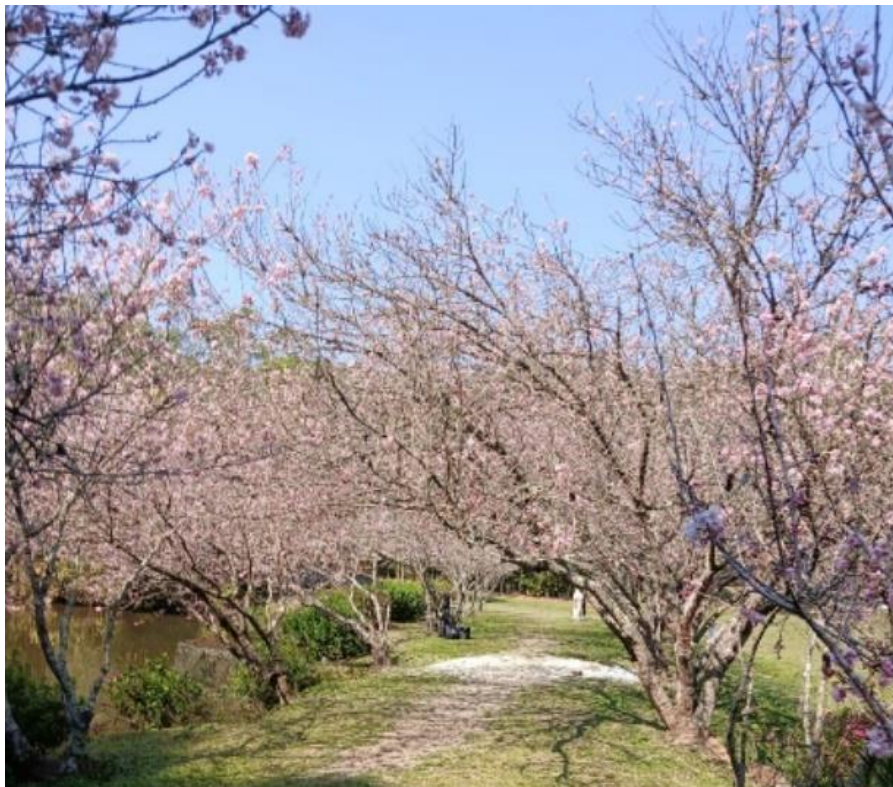
慰霊碑清掃作業、桜と円光寺

ソロカーバ 8期 早川量道

8月24日（土曜日）、円光寺境内にある南米産業開発青年隊慰霊碑の清掃に行って来ました。申し合わせた三人の内、行けたのは、曾我義成さんと私で、長田響歳さんは行けませんでした。写真を掲載します。



磨いた慰霊碑と私と曾我さん（右側）です



外部から円光寺と金閣寺境内へ入るための通路の桜並木です。桜の開花が始まっています。

円光寺と開花し始めた桜です。左に慰霊碑が見えます。



2024年8月24日撮影



南青協月間会計報告（6月分）

2024年6月30日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	5月よりの繰越分			28.258,68
12/Jun	年会費 6期猪口光盛氏(115)		200,00	
17/Jun	年会費 8期丸谷良守氏(231)		200,00	
30/Jun	年会費 7期鈴木貞男氏(188)		200,00	
	Rendimento		151,81	
	Total		751,81	29.010,49

前号掲載の6月分のRendimentoを上記のとおりに訂正します。

南青協月間会計報告（7月分）

2024年7月30日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	6月よりの繰越分			29.010,49
30/Jul	会報 228号(copia)	1.641,75		
30/Jul	会報 228号(correio)	817,40		
	Rendimento		166,68	
	Total	2.459,15	166,68	26.718,02

南青協月間会計報告（8月分）

2024年8月31日迄

Data	Descrição	Débito	Crédito	Saldo
	7月よりの繰越分			26.718,02
19/Ago	年会費 2次三沢貞夫氏(21)		200,00	
	Rendimento		152,50	
	Total	0	352,50	27.070,52

Bradesco の支店番号と口座番号 Extrato Conta Corrente Takatoshi Osada Agência 1480 Conta 0033226-7 Disp.P / Poupança	Saldo Total	27.070,52	Agência 1480 Conta 33226-7 Takatoshi Osada CPF 698.506.588-00 CEP 04371-000 Cheque の送り先 Takatoshi Osada Rua Rishin Matsuda,467 VI. Sta. Catarina Jabaquara - SP
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------	------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------



一人の先輩が亡くなりました

サンパウロ 単独 渡辺進

昨日先輩方もご存じの日本の友人、松永賢一からメールが入った。

「宗片瑞夫さんが7月17日に亡くなった。今年の1月に糖尿病が悪化し入院し、その後退院して家で療養していたが昨日亡くなった。安らかな亡くなり方だった。」ということだった。

宗片さんという方は私の青年隊の1年先輩で入隊時の班長だった。北海道出身だ。後輩の面倒見がよく、先輩にもかわいがられ信頼されていた。

私などお調子者で酒を飲んで破目を外しても、ニコニコしながら「お前はバカだなー」というぐらいでお説教じみた事は言われた記憶はない。

一歳しか年は変わらなかったが、ある時は兄貴、ある時は親父、不思議な魅力ある人だった。先輩方にため口をきいても説教されないどころか、かえってかわいがられる。長澤先生にも信頼され、かわいがられていた。親分肌でもあった。

初代青年隊協会会長の升ノ内さん、九州の光森さんとも親しく、皆さん青年隊協会の為一生懸命だった。そしてワイドエンジニアリング株式会社という地盤改良専門のアンカー打ちの会社を立ち上げ独立した。

私がエレクトロプラネットを退社して何かを始めようと思い、そのための資金を稼ぐつもりで日本に行った。サーどうするかと久しぶりの実家で酒を飲んでいた。宗片さんから電話が入った。すぐに俺のところに来いと。それから1から10まで面倒を見てもらった。

その時、私をワイドエンジニアリングの社員にしてくれ、私が仕事をやめブラジルに帰っても厚生年金を掛け続けてくれた。その年金を私は現在もらっている。ありがたいことだ。

南米産業開発青年隊45周年記念大会にも参加してくれた。山川正三さん（青年隊OB）という親友と一緒に訪伯ししばらく滞在してくれた。3人でリオデジャネイロ、斎藤信夫さんがいるフォス・ド・イグアスに行った。楽しい思い出だ。

青年隊には素晴らしい先輩、後輩がいる事を、一人の先輩が亡くなったことで改めて感じる。幸せと寂しさを強く感じる。
青年隊には素晴らしい師、先輩、後輩が大勢だ。
青年隊員であって良かった。この幸せを再度かみしめる。

去年、体調を崩して日本の75周年大会に参加することができなかった。
仲間に会えることを楽しみにしていたが残念だった。
これからは、仲間が亡くなることも多くなっていくだろう。
いつまでも元気でいたい、そうはいかない。今日を大事にすることだ。

この原稿を書いているさなか、松永賢一から再度メールが入った。
青年隊同期、ブラジルに来てエレクトロプラネット社と一緒に働いた小沢順が亡くなったとのこと。一週間で2回の訃報だ。

合掌



曾我さんより南青協慰霊祭の写真が送られてきました。
それで創立者の長沢教官を讃える詩と青年隊員を讃える詩を作りました。

長沢亮太教官を讃える詩

大地の夢を抱きし人よ
遠き南米へと夢を運び、
若き青年たちに希望を与え、
未来の種を蒔き続けた。

戦後の混乱に立ち向かい
復興と繁栄の道を照らした、
その手は決して止まらず、
希望の光を世界へ広げた。

長沢亮太、その名は輝く
南青協の礎を築きし師、
青年隊員たちを導きて、
大地と共に夢を実らせる。

彼の遺志は今も生きて
七十年の時を越え、
南米の風に乗りて吹く、
新たなる未来へと続く道
あゝ 我が産業開発青年隊。

産業開発青年隊員を讃える詩

大地の声に耳を傾け
広がる南米の荒地に立ち、
夢を胸に進んだ隊員達の若き魂。
大地は容易く耕せずとも、
その手は新たな希望を蒔いた。
試練の中で鍛えられた意志
嵐が襲い、道は険しく、
隊員達の足跡は深く刻まれた。
だが、夢を背にした者たちは苦しみを
乗り越え、更に強くなった。

世代を超えて受け継ぐ魂
今、二世、三世の時代が来た。
祖先の汗と涙で固めた絆を、
信じる未来へと繋ぐ者たちが、
七十年の光をさらに輝かせる。

希望のバトンを手に
新たな時代の地に立ち、
次なる夢を育む若者たち。
彼らの足跡は消えず、
未来へ続く道を照らし続ける。

あゝ 我が産業開発青年隊！
隊員達の夢と共に、二世、三世の勇者
たちよ、
七十年の歴史に希望を重ね、その魂は
永遠に未来を照らし続ける。



自分史（49）

ポルトガル 10期 岡井よししげ

ポルトガルへの移住手続きを開始してから、もう3ヵ月が過ぎようとしています。時間が経つごとに焦りか募ります。というのも、飛行機の切符の有効期限が3ヵ月なのです。期限が切れれば、新たに切符を買い直さなければならず、それを考えるだけで本当に腹立たしい。

しかし、それ以上に心配なのは、果たしていつ移住の許可が下りるのかということです。移住権は本当に取得できるのでしょうか？ 移住局に何度も足を運んで「いつ許可が下りるのか？」と尋ねても、返ってくるのは「待て、待て」という言葉だけ。はっきりとした期日は教えてくれません。

本来なら45日以内に結論を出すという規則があるはずですが、役所の仕事はまるで他人事のように。市民のためではなく、自分たちの都合だけで動いているように感じます。

そんな状況の中、幸運にもある人を紹介され、ポルトガルの首都リスボンにある本店の移住課へ友人と共に行くことに。なんと、その友人は移住課で働いている有力者と知り合いだったのです。その人の力を借りて、私の移住手続きがどうなっているのか、どこに書類があるのかを調べてもらいました。まさに運が味方してくれました。

その友人によれば、私の前にはまだ300人ほどの申請者がいるらしく、通常なら2~3ヵ月にかかるだろうとのこと。でも、特別に別の係の人に頼んで、私の書類を優先的に処理してもらったので、遅くとも1週間以内には返事が来るはずだと言ってくれました。この友人のありがたさは、何にも代え難いものです。

しかし、ブラジルでは「アミーゴ・デ・オンサ」と呼ばれる友人も多いものです。「オンサ」とはジャガーのことで、その名の通り、表面上は友達のふりをしているだけで、実際には興味本位の偽りの友人、つまり裏切り者です。常に何かしら利用しようとしてくる人たちです。

ここポルトガルでも私は、かなりの「アミーゴ・デ・オンサ」に悩まされました。そんな中、再び幸運が訪れました。1週間後、ポルト市の移住課から「来てください」という連絡が入ったのです。

急いで向かうと、係の人から「当地で生活できるだけのお金を持っているのか？」と尋ねられました。私はカバンを開け、ドルの束を見せると、「問題ありません」と言われ、移住許可書の手続きを進めてくれました。

実際には、そのドルの束の中には紙が詰まっており、まるで3万ドルがあるかのように見せかけただけ。友人から少し借りて、本当はごくわずかだけしか持っていませんでしたが、ここでの「トリック」が功を奏しました。

許可書が発行されるまでにもう1週間ほどかかるらしいので、帰りの切符も手配しなければなりません。その日の夕方、友人と共にドウロ川の岸边にあるお気に入りのレストランへ向かいました。

そこのご主人、マヌエルさんは本当に親切で、私をまるで長年の友人のように接してくれます。この地で心から信頼できる人がいるということが、どれほど安心できるかを改めて感じました。

実は初めてそのレストラン(店の名前はCHE LAPIN—うさぎ)に連れて行ってもらったとき、食事が終わった後に驚くべきことが起こりました。そこのご主人、マヌエルさんが私にこう切り出してきたのです。「実は、体中が痛くて、夜もほとんど眠れないんです。

薬を飲むとなんとかやり過ごせるんですが、薬ばかりに頼りたくない。あなたの指圧で少しでも良くなるでしょうか？」

私は少し考えてから答えました。「やってみなければわかりませんが、ここはレストランですし、座ったままでは無理です。うつ伏せでないと施術はできません」と言うと、マヌエルさんは「では、隣の家に行きましょう」と言って、私を案内しました。

そこはまるで秘密基地のような物置で、テーブルが乱雑に置かれていました。彼はテーブルをいくつか並べて即席のベッドを作り、そこに横たわ

ったのです。私は彼の背中の膀胱経を軽く押してみました、まるで岩のように硬い。「かなりストレスが溜まっているようですね」と言うと、マヌエルさんは目を見開いて驚き、「どうしてそれがわかるんですか？」と聞いてきました。

施術を進めるうちに、彼は突然泣き出しました。しかし、そのまま指圧を続けると、やがて涙が止まり、「なんて気持ちがいいんだ！」と、満面の笑みを浮かべてくれました。実は、指圧中に涙を流す人は少なくありません。それまで溜まっていた何かが解き放たれ、体が軽くなるのです。まるで長い間きつく縛られていた縄が一気に解けたかのように、解放感を味わうのです。

それ以来、マヌエルさんは私をすっかり気に入ってくれ、私たちはすぐに友達になりました。そんなある日、帰りの切符の話をしていると、マヌエルさんが「ちょっと待って。ブラジルからポルトガルに来たまま、帰らない人がいるんだ。その人の切符を安く譲ってもらうことができるかもしれない。私に任せておけ!」と言ってくれたのです。

翌日、彼から「切符が手に入ったから取りに来なさい」と連絡があり、私は友達と一緒に夕食を兼ねてレストランに向かいました。その切符は少し事情ありのものではありましたが、三分の一の価格で手に入れることができました。あと三日で出発というところで、荷物の重量が心配になりました。

当時は 60kg まで持ち込めましたが、どう見てもオーバーしているので、出発当日、飛行場に向かい、マヌエルさんの言葉を思い出しながら受付に行きました。「〇〇さんをお願いします」と伝えると、すぐに彼が現れました。

彼は私を別のカウンターに案内し、まるで魔法のように搭乗券や荷物の手続きをあっという間に済ませ、「ボア・ヴィアジェン!」と笑顔で送り出してくれました。その瞬間まで、胸のドキドキが止まらず、脇の下には

冷や汗がびっしょり、でも無事に搭乗できたことで、ようやく安心したの
でした。

無事に念願のポルトガルの居住権を取得したものの、その有効期限が3
か月しかないため、期限内にポルトガルに戻らなければ無効になってしまう
というプレッシャーがあった。そこで、すぐに家族の居住権も取得する
必要があり、急いで手続きを始めた。

幸い、家長である私が居住許可書を持っているので、現地のリスボンの
領事館で手続きをしても問題ないとのことだった。しかし、ここで最大の
難関が浮かびあがった。それは、「よっちゃん」自身が再移住に積極的で
あっても、妻や子供たちがどう思うか、という点だ。

23年間ブラジルで必死に生活し、治療の仕事を軌道に乗せるまで苦勞
してきた妻が、また一から新しい土地でやり直すなんて絶対に反対するだ
ろう。

それは火を見るよりも明らかだ。だが、子供たちはどうだろう？子供たち
は自由な環境で育っているから、どこに行こうがあまり気にしないだろう
と、「よっちゃん」は考えた。そして、子供を説得することができれば、
家族全員でポルトガルへ行けるのではないかという希望を抱いたのだ。

「よっちゃん」は色々と考えた。先に一人でポルトガルに渡り、仕事を通
じて生活の基盤を固めてから家族を呼ぶという方法が一番安全だと思っ
たが、心の中では一緒に行ってほしいという気持ちでいっぱいだった。

そこで、一人ずつ子供を呼んで説得を始めた。まず長男の広志には、
「ポルトガルに行けば、旅行好きのお前はヨーロッパの珍しい国々をすぐ
に訪れることができるぞ！」と話しかけた。すると広志は興味を示し、パ
パイ(父親)の提案に賛成してくれた。

次に次男の龍太郎には、「お前は食いしん坊だから、ポルトガルに行け
ばすぐにフランス料理やイタリア料理を食べに行けるんだぞ！」と持ちか
けたところ、龍太郎は目を輝かせ、「行く!行く!」と大はしゃぎしてパ
パイに賛成してくれた。最後に娘の聖子(まさこ)には、「ポルトガルに行け

ば、フランスやイタリアでおしゃれな靴や服を買えるぞ」と言うと、彼女はニコッと笑って「パパイについて行く」と言ってくれた。

その日の夕食時、家族全員に「ポルトガルと一緒に行く」と宣言すると、案の定、妻がすぐに反対の声をあげた。「やっところまで来て、素晴らしい生活ができ始めたのに、なんでまたポルトガルに行くの?」と。でも、「よっちゃん」は子供たちの意見をまず聞いてみようかと提案し、話を進めた。「本当に一緒に行きたいのか?」と子供たちに尋ねると、全員が「行きたい!」と返事をした。

これには妻も驚き、子供たちは一体どうなっているのかと目を丸くしたに違いない。それにしても、あの頃のブラジルはインフレが凄まじく、月に20~30%のインフレ率だったため、経済的にはある程度楽だった。

お金を貯めてポーパンサ(預金)に入れておけば、利息とインフレ分が加えられて、生活がしやすかったのだ。しかし、主婦にとっては買い物が大変だった。毎日のように物価が変わるため、どのスーパーが安いかを近所のご婦人方と情報交換し、買い物に行く日々だった。

しかしブラジルはハイパーインフレにどんどん入り込んでいく状態で、その頃は一日に3%になり、毎日朝と夕方の物の値段が変わっている時期だった。でもまだ品物が店にあれば良いが、肉を買うときは3時間以上も列に並んで買う状態だった。

そうこうしているうちに、ついに待ちに待った居住権が1986年のクリスマス直前に発行された。許可書が届くや否や、急いでポルトガル行きの準備を始めた。というのも、「よっちゃん」の居住権の期限があと一週間しかなかったからだ。バタバタと荷物を整理し、家財道具を片付け、友人に譲ったり、子供たちの学校の手続きも済ませたりと、年が明けるまで慌ただしい日々を過ごした。そして、できるだけ多くの荷物を持って、1986年の正月早々、私たちは飛行場へと向かったのだ。

つづく



屁こきの夫婦

ポルトガル 10期 岡井よししげ

昔々、ある貧しい村に百姓夫婦が住んでいました。この夫婦は揃って病気になる、毎日寝込んでいましたが、幸いにも彼らには一人息子の田子平がいました。田子平はとても働き者で、両親を心から大切にしていました。ところが、田子平はどこか抜けていて、生活はいつもギリギリ。家族はいつもお腹を空かせていたのです。

そんなある日、遠くに住んでいるおじさんが田子平一家を訪ねてきました。このおじさん、時々訪れては色々手助けをしてくれる優しい人。ところが今回は、なんと「お嫁さん」を見つけたと言って、田子平にお嫁さんを連れてきました。

そのお嫁さん、顔はお多福面そっくりで、しかもお腹が「ドーン」と前に出ていて、見た目はちょっと不思議。でも、誰よりも働き者でしっかり者。田子平の両親を丁寧にお世話し、家中ピカピカにしちゃうので、みんなから感謝されていました。

ある日のこと、田子平夫婦は山菜を取りに山へ出かけました。ところが、うっかり山の斜面から転げ落ちそうになってしまい、小さな木にしがみつきました。だけど、その木ごと一緒に転がり落ちてしまったんです！ふたりがしっかり掴んでいたその木の根っこには、なんとヘンテコリンな芋がくっついていました。

「これ、なんだろう？」と夫婦は家に持ち帰り、匂いを嗅いでみると、とても美味しそうな香りが！早速、それを煮て食べることにしました。ただ、万が一のことを考えて、両親には山菜料理を振る舞って、自分たちは芋を食べたのです。その芋はとても美味しくて、田子平夫婦はついつい全部食べてしまいました。

翌朝、田子平夫婦が目を覚ますと、なぜか二人はじっとお互いを見つめ合っていました。

そして、突然、田子平が「いくぞー！」と掛け声をかけた瞬間、ものすごい勢いでお尻から「プスー！」と大きな屁が！

なんと、二人ともその芋のせいで、ものすごい屁こきになってしまったのです。

そこから、村では「屁こきの夫婦」として有名になり、村人たちはその音に大笑い。彼らのおかげで村は毎日笑い声に包まれ、夫婦の生活も何やら明るく楽しいものになりました。

こうして、田子平夫婦は笑いと屁でいっぱい幸せな人生を送るようになったのです。

「めでたし、めでたし！」と思いきや、物語はまだまだ続きます。

田子平と嫁さんの「屁こき」能力が発揮されたのは、その翌日からのこと。日が経つにつれ、ふたりの屁の勢いが日に日に強くなり、特に田子平の屁はまるで突風のように凄まじくなっていきました。ある日、田子平はふと思いつきます。「この屁の力、何かに役立てられないだろうか？」と。

その頃、田子平の村と隣村を繋ぐ川には、のろのろと動く渡し船がありました。船頭さんもいつも困っていて、村人たちも渡し船が遅いことに不満を感じていたのです。そこで田子平は、船に大きな帆を張り、自分の屁を帆に向けて思い切り放ってみることにしました。

「ブワー　ー　ー　！」と響き渡る屁の音とともに、船はまるで風を受けたようにビューンと川を横切り、あっという間に隣村へ到着！

これには村人たちもびっくり仰天。渡し船がこれほど速く進むのを見たことがありませんでした。こうして、田子平は「屁の風力渡し船」として大いに感謝され、その渡し賃で家族の生活は次第に豊かになっていきました。

一方、田子平の嫁さんもまた、秋の柿の季節に大活躍。

お嫁さんの屁は、木にたわわに実った柿をまるで手で落とすように、次々とポトポト落としてくれるのです。「ブッ、ブッ！」と柿の木の下で

屁を放つたびに、柿がボロボロと短時間で落ちてきて、村人たちは大喜び。「こんなに早く柿を収穫できるなんて！」とお礼に柿をたくさん贈られ、夫婦の食卓はいつも柿で溢れるようになりました。

そうして得た渡し船の収入や柿のお礼のおかげで、田子平夫婦は良いお医者さんにかかることができ、病気だった両親も次第に元気を取り戻し、ついには畑仕事もできるようになりました。村中が二人の屁に感謝する日々です。

そして驚くべきことに、嫁さんが屁をこくたびに、あの出っ張ったお腹がどんどん引っ込んでいくではありませんか！さらに、顔もあの「お多福面」に似ていたのが、日に日に可愛くなり、ついには村一番の美しい女性と評判になるまでに。しかも、相変わらず働き者で、村人たちからの感謝は絶えません。

こうして田子平夫婦は、笑いと屁で村の人気者となり、どんどん幸せになっていったのでした。

ハイ、これでめでたし、めでたし！



最高裁の独善と腐敗

サンパウロ 9期 貝田定夫

8月13日、ブラジルの有力紙、フォーリャ・デ・サンパウロ (Folha de São Paulo) がモラエス最高裁判事に関する暴露記事を公表した。

モラエスは強権を振るい反対勢力を弾圧してきたが、あくどい卑怯なやり方が暴露されブラジル社会に衝撃を与えている。

フォーリャ紙によると、2022年10月、モラエスの部下が高等選挙裁判所(以下選挙裁とする)の偽情報監視部門の担当者に、あるジャーナリストが発信したメッセージを送り、「最高裁による凍結と罰金が出るよう、報告書を作ってください」と依頼した。

上述のジャーナリストの名はロドリゴ・コンスタンチーノ、保守系の新聞(Gazeta do Povo)に所属する。コンスタンチーノはソーシャルメディアに投稿してモラエスの独善と傲慢な態度をこき下ろした。

怒ったモラエスは、「偽情報を発信した」理由でコンスタンチーノのアカウントの凍結と罰金を科すことを決め、その根拠となるような報告書の作成を部下に命じたのである。

当時、モラエスは選挙裁の長官も兼務していたので、最高裁と選挙裁双方の部下を自由に使える立場にあった。そこで選挙裁の偽情報監視部門を利用して報告書を作らせ、「偽情報を取り締まる」名目で反対勢力の弾圧に使っていた。表向きは選挙裁の報告に対して最高裁が適切に対応した、という事にしている。

2022年11月、アイルトン(モラエスの部下)はタグリアフエロ(選挙裁の偽情報担当)に「ボウソナーロ派の議員達が最高裁と選挙裁の判事を侮辱した発言をしていないか見て戴きたい」と依頼した。ボウソナーロ派の上院議員と下院議員あわせて10名がその対象になっている。

モラエスは自分ら判事達と敵対している議員達を厳選し、少しでも自分たちを批判すれば直ちに報復する準備をしていた。その手口は前述した通りで、報告書を作らせ「偽情報を取り締まる」名目で、アカウントの停止や罰金を科す。場合によっては銀行口座の開示、パスポートの没収、資産の凍結などとなっていく。

さらにアイルトンとタグリアフェロ間の会話として次のものがある。アイルトンは「彼はエドアルド・ボウソナーロを捕らえたいと言っている。例の外人と関係があるんだよ」と話した。

この会話を説明すると、モラエスはボウソナーロ前大統領の息子エドアルドを逮捕したいと言っている。エドアルドはアルゼンチン人の友人と一緒にあって、「2022年の大統領選で不正があった」とソーシャルメディアに投稿し、大統領選の不正をアルゼンチンにまで広めている。

その後、モラエスの気持ちを忖度したタグリアフェロは報告書の下書きを送り、「モラエスが気に入るかどうか見て戴きたい」と頼んだ。こうして出来上がった報告書を反対勢力弾圧の根拠にしていた。

これまで三つの実例について述べたが、フォーリャ紙の暴露記事の一部に過ぎない。全体としては、これらの数十倍の量に達している。

民主国家では種々の犯罪に次のように対処している。警察は捜査を担当し、検察は状況と証拠品を分析し起訴するか否かを決める。裁判所が起訴を受理すれば裁判となり、判事の出番となる。そして判事はどちらにも偏らず公正な立場でなければならない、というのが大原則となっている。

しかし、暴露記事で明らかになったことは、判事であるモラエスは自分自身で告発し、捜査もせず、検察なし、裁判なしで、独断専行している。まさに独裁者のすることで完全な違法行為である。しかも偽の報告書を根拠に刑罰を決めるといふ、言語道断なことをしている。

ここで暴露記事に対する反応を見てみたい。最初にコメントしたのは最高裁の判事達だった。バローゾ最高裁長官は「モラエス判事の全ての行動は判事の責務を誠実に遂行したものである」と述べた。次いで他の判事達の同僚を擁護する発言が続いた。判事達はモラエスを全面的に支持し、重大な犯罪行為には目をつむっている。最高裁は完全に腐敗している。

パウロ・ゴネ検事総長は「モラエス判事は勇気をもって誠実・公正に職務を遂行した」とモラエスを称賛した。検事総長は判事達とは違った立場

にあり、モラエスの暴走に歯止めを掛けてもよさそうなものだが、全く期待外れの発言だった。

パウロ・ゴネは2023年11月、ルーラに指名され検事総長になった。この時、上院の承認を得るためルーラは議員を買収している。ルーラに対して恩義があるのか政府や左翼への批判はしない。検事総長ならば色々言うべきことがあるのだが、全く存在感のない男で判事達の言い成りになっているように見える。ルーラを始め大臣など政府高官は何も言わず、政府の顧問弁護士が「誠実・公平に責務を遂行した」とのみ述べている。

ボウソナーロ派の国会議員を主体とする野党連合は直ちに記者会見を開き、モラエスに対して弾劾による罷免を要求すると発表した。実は、これまで度々モラエスに対する弾劾を要求してきたのだが、ことごとく上院議長のパシェコに阻止されている。今回の暴露記事はブラジル社会に大きな衝撃を与えているので、国会議員だけでなく、国民にも呼びかけ圧力を強めようとしている。

法学者や政治学者は、「最高裁の判事を罷免する唯一の方法は国会における弾劾裁判である」と指摘している。モラエスに対する弾劾要求はどうかなるであろうか。最初の段階として国会で審議されるかどうかの問題がある。議題にするか否かは上院議長の権限なので、パシェコが「よし」と言わなければ審議されることもなく終わってしまう。国会で弾劾裁判になったとしても、議員の2/3の賛成が必要で非常に高い壁がある。

パシェコは最高裁の判事達と気脈を通じている。ルーラ政権ともいい関係にある。自身の政治生命を考えて現在の関係を続けて行く、と予想される。

さらに国会議員について言えば、気骨のある議員は少数であり、多くの議員が金や利権しだいで右にも左にも動く。ルーラが買収に動けば弾劾要求の動きは直ぐに潰されてしまう。実に嘆かわしいことであるが、左翼独裁体制にある限り変わることはないであろう。



人のよりどころとなるものとは

産業開発青年隊同窓会長 鈴木 浩明

この世の中、先が見えず、混とんとしており、暗闇の中を歩むような状況であります。中東では数千年前の人々のよりどころであるはずの宗教がもととなり、戦争が起こっています。また、世界中で、様々な考え方の違いにより戦争が起こっています。

人は権力を手にすると、その権力を手放せなくなります。また、良い暮らしを知ると、その生活を下げることが難しくなります。それは、人間には欲があり、際限のないものであり、その欲の魔力に取りつかれると餓鬼のように、いつまでも満足ができなくなります。

裕福な王家の子供として生まれた、釈迦は、人間は、なぜ生老病死の苦しみから、逃れられないのかを探求するために、すべてを捨て、出家をしました。そして苦行を通じて、欲（煩惱）を断ち切ろうとしました。

しかし、断ち切ることは、できませんでした。そして、苦行では、悟りを得ることができないことを悟り、苦行をやめ、村娘のスジャータより乳粥の布施を受け、体力を持ち直し、瞑想をし、悟りを得ることができ、仏陀となったとされています。

そして、人々に語り伝えるべきかどうかを考えました。その結果、この真理は世間の常識に逆行するものであり、「法を説いても世間の人々は悟りの境地を知ることはできないだろうから、語ったところで徒労に終わるだけだろう」との結論に至りました。

しかし梵天が現れ、人々に説くよう繰り返し強く請われたとされます。そして3度の勧請の末、釈迦は世の中には煩惱の汚れも少ない者もいるだろうから、そうした者たちについては、教えを説けば理解ができるようになるだろうとして、開教を決意したそうです。

そして、仏陀が生存したときの最後の教えが、法華経であるとされています。この教えは、難解難入であるとされています。しかし、この難しい教義をもとに、人々を、教化したのが、日蓮聖人です。そして南無妙法蓮華経のお題目を表しました。

この法華経の教えの中に常不軽菩薩が現れます。この菩薩はどのような人々に対しても「あなたは、仏となる方です。私はあなたを敬います。」と礼拝をします。しかし、未熟であるのに自分は仏法に精通し、仏行を行っていると思っている者は、馬鹿にされていると思い、石を投げたり、つえで殴ったりして、迫害を行います。

その後、常不軽菩薩は命尽きた後、法華経を他者のためにと、仏となります。そして、その仏こそが今の釈迦であると明かされます。そして、近代文学で、この常不軽菩薩を表しているのが、宮沢賢治の「雨にも負けず」です。

「雨にも負けず 風にも負けず 雪にも夏の暑さにも負けぬ 丈夫な
体を持ち 欲はなく決して怒らず いつも静かに笑っている 1日に
玄米4合と 味噌と少しの野菜を食べ あらゆることを 自分を勘定に入
れずに よく見聞きしわかり そして忘れず 野原の松の林のかげの
小さな萱葺の小屋にいて 東に病気の子もあれば 行って看病してや
り 西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い 南に死にそうな人
あれば 行ってこわがらなくてもいいと言い 北に喧嘩や訴訟があれば
つまらないからやめろと言い 日照りの時は涙をながし 寒さの夏はオ
ロオロ歩き みんなにデクノボーと呼ばれ ほめられもせず 苦にもされ
ず そういうものに わたしはなりたい」

この「雨にも負けず」には、デクノボーと呼ばれるのは、この人ではないかといわれている人がいます。それは、斉藤宗次郎という人物です。

ただ、このことは宮沢賢治が断定しているわけではないので、あくまで推測です。

齊藤宗次郎は小学校の教師をし、23歳で洗礼を受けました。彼は岩手県花巻市で最初のキリスト教徒と伝わっています。

当時、キリスト教徒は「国賊」とののしられ迫害されました。洗礼を受けた齊藤宗次郎に対して、花巻の人々はものすごく冷たい目を向けました。彼は他人だけでなく身内からもものしられ、親から勘当されました。

彼の娘（9歳）は学校でいじめられてお腹をけられ、その数日後に腹膜炎を起こして亡くなってしまいます。また、日露戦争に反対したため、岩手県の教育会から追放され、小学校教師の職を解かれてしまいます。その後、宗次郎は新聞配達をして生計を立てながら、病人を見舞い、人のために祈り続けたそうです。

彼は雨の日も風の日も雪の日も暑い夏の日も、休むことなく町の人たちのために祈り働き続けました。そんな生活をしながら、宗次郎は宮沢賢治と農学校で親交を深めていきました。

やがて、20年余の歳月が過ぎたころ、師と仰いでいた内村鑑三からの要請があり、宗次郎は上京する決心をしました。

東京へ行く汽車に向かうとき、宗次郎は自分を見送ってくれる人は1人もいないだろうと思っていました。ところが、駅には花巻の人々がたくさん見送りに来ていました。そこには、一般の人だけでなく、長をはじめ町の有力者、教師、祭主や僧侶の姿も見えたのです。

町の人々は宗次郎が自分たちのために奉仕の精神で尽くしてくれていたことを、きちんと見ていたのでした。

私たちは、命ある限り、様々な苦難の道を歩まなければならないはずで、その時に大切なことは、心清らかにただひたすらに相手を信じること、迫害を受けてもその人を信じ続けることだと思います。

日蓮聖人は、「人の寿命は無常である。やがて吐く息ばかりになり、息を吸うことができなくなる。人の命の儚さは、風に吹かれる朝露よりも儚ものである。賢い者も、愚かな者も、老人も、若者も、いつ生命を失うかわからない儚さが世の常である。だから、人はまず死に対する心構えについて習い、その後に他の事を学ぶべきなのである。」と遺文の中でいわれています。

生き方を決めるのは、自分自身であります。悩んだ時、困ったとき、進むべき道は、困難のある道を選べど、賢人は言われています。自分自身を律し、人から後ろ指をさされない人生を歩むこと。そして、どのような結果となろうとも、心清らかに相手を信じるのが、大切なことだと思います。

人は、結果を求めてしまいがちですが、それだけではなく、目に見えぬ力があることを知ること大切だと思います。目に見えぬ力が、その者には早すぎるとなれば、与えないでしょうし、今しかないとなれば、すぐにも与えるでしょう。私の場合には、30年後に、マレーシア語で活躍できる時が来ました。これも目に見えぬ力の思し召しかもしれません。

どのように大変な時にも、目に見えぬ力を信じるにより、困難な人生を成し遂げることができるのだと思います。



インドネシアに行ってきました

産業開発青年隊同窓会長 鈴木 浩明

一般社団法人建設技能人材機構（JAC）の、日本の建設業務体験会で富士教育訓練センターの一員としてインドネシアに行ってきました。まずは、JACと富士教育訓練センターについて説明します。JACは、深刻化する人材不足を抱える日本の建設業界に、建設分野における外国人材の適正かつ円滑な受入れを実現するために、2019年4月に設立された組織です。

JACは、総合建設業を営む企業を構成員とする建設業者団体、専門工事業を営む企業を構成員とする建設業者団体等が協力して、建設分野における特定技能外国人（以下「建設分野特定技能外国人」という）その他の外国人材の適正かつ円滑な受入れ等に関する事業を行うとともに、建設技能者の技能評価その他の建設技能者の確保等に関する事業を行うことにより、建設分野における人材の確保を図り、もって日本の建設業の健全な発展に資することを目的として設立されました。

富士教育訓練センターは、富士教育訓練センターは、建設現場で直接「ものづくり」に携わる建設専門工事会社、設備会社、建設関連業団体（建設専門業団体）等が、優れたものづくりはまず「人づくり」からと強い信念の元、関係官公庁及び諸団体のご協力を得て、平成9年4月に静岡県富士宮市の旧建設省（現国土交通省）建設大学校中央訓練所跡地に開校した、建設技術者・技能者の教育訓練施設です。

富士教育訓練センターで行う教育訓練は単なる職業訓練や教室での学習、勉強ではなく、現場に即した技術・技能はもちろん、社会人としてのマナー教育も行う「人づくり」プランを提供しています。

産業開発青年隊同窓会は、富士教育訓練センターの賛助会員となっており、富士宮市周辺の同窓会会員の中でも、非常勤講師として、協力されているかたもいらっしゃいます。

私も、設備・ライフライン担当の、非常勤講師として協力させていただいています。JACはインドネシアを人材受け入れの最重要国の一つとしており、今回の「日本の建設業務体験会」では、インドネシアの工業高校生等に、「足場体験」「鉄筋施工体験」「型枠施工体験」「VR体験」等を通じて、日本の建設業の魅力を体験していただく機会を提供するために開催されました。

今回のJACの、日本の建設業務体験会では、富士教育訓練センターが体験コンテンツ監修・設計を担当しました。そして、私は、マレーシア滞在の経験があり、言葉も多少理解できるということで参加させていただくことになりました。4月3日に富士教育訓練センターで顔合わせをしました。4月12日JACで第1回目の打ち合わせ。月に1,2回程度東京のJACの事務所で会議を行いました。

5月15日より17日までインドネシアの会場の下見を行いました。会場は、ジャカルタ市内より南方にあるインドネシア コンベンション エキシビジョン (ICE) BSD CITYという会場で、日本でいえば、幕張メッセのような会場です。

7月30日より8月4日までICEにおいて、会場設営、模擬実演を行いました。そして、8月22日出国、23日設営監督、24日、日本の建設業務体験会本番、25日帰国となりました。

インドネシアは、非常に親日的な国です。これは、第二次世界大戦により、日本軍が、オランダ軍を破ったことによります。「日本は私たちの兄」「万歳大日本」などの支持を叫ぶインドネシア人から楽観的な熱意で歓迎されました。インドネシアには「インドネシア民族は長い間、異民族に支配されるが、やがて北の方から黄色い肌の民族がやってきて、白人を追い払い、しばらくの間統治するが、トウモロコシの実るころまでに去り、その後には独立が訪れる」という「ジョヨボヨ (英語版)」という伝説があり、この伝説も日本への期待感を助長したとみられます。

また、終戦後、日本兵約 3000 名が、帰国せず、インドネシア独立戦争に参加し、インドネシア独立に貢献したという事実もあります。

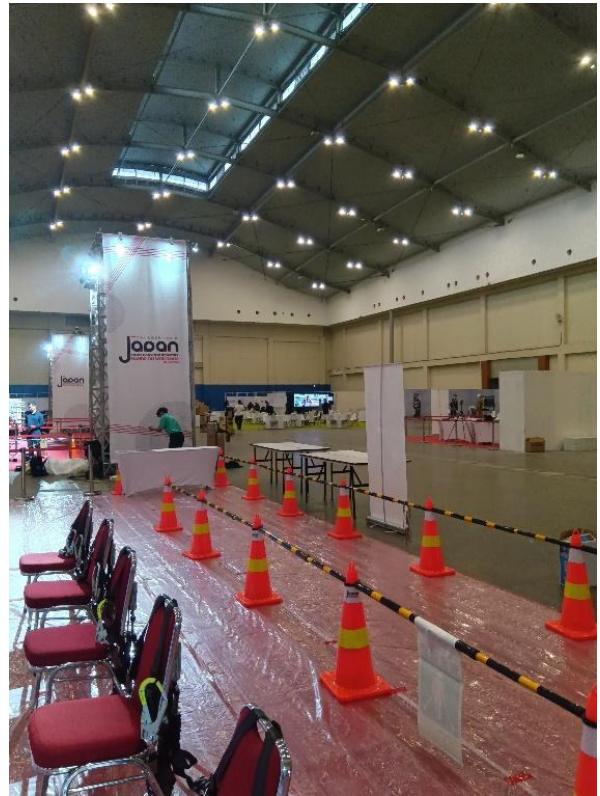
今回の「日本の建設業務体験会」では、多くのインドネシアの方々と接することになりました。インドネシアの方々は、私たちに対して、敬意の念を抱いていただいていることがよくわかりました。飛行機の中、ホテルの中、会場の工業高校の生徒や先生、皆、丁寧に接してくれています。高校生も実演の後、私たちに、最敬礼で頭を下げてくれました。また、先生方も、握手をした後、その手を胸に手を当てて尊敬の念を示してくれました。

何か、心温かくなる気分でした。言葉が通じることは、大変楽しいことでもあります。次回、もしインドネシアに行くことがあれば、インドネシア語をもっと勉強をし、会話に困らないようにしたいと思いました。また、今の日本人が忘れ去ったものが、インドネシアの人々の心の中には息づいているのではないかと思います。これは、海外に出てみないと感ずることのできないことではないかと思います。

また、彼らがもし日本に来日した時には、多くの日本人の方々が、優しい気持ちをもって受け入れていただきたいと思います。還暦を過ぎ、海外で、仕事をするようになるとは、思ってもいませんでしたが、本当に貴重な体験をさせていただきました。多くの関係者の方々に御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。



空港にて



広い会場で奥行き約90メートル、幅が約60メートルでした。
この写真の右に組み立てられた足場コーナーの一部が見えます。



足場担当の大成建設の方々と足場の貸与業務をしているアルインコ社の皆さんと一緒に記念撮影しました。私は後列の中央です。



コロナ禍は去ったけれど

フォス・ド・イグアスー 齋藤信夫

私の居住地であり、仕事場でもある、当地フォス・ド・イグアスーは、世界的にも有名な、「イグアス瀑布」のお陰で、世に知られています。

それで産業と云えば、観光業が盛んで、ホテル、旅行社、レストラン、土産店等などが主で、それ以外ですと、街がアルゼンチン、パラグアイと国境を接しておりますので、特にパラグアイとは交易が盛んです。

街にはサービス業が多いため、コロナ禍の3年半程は、街が沈んで、まるでゴーストタウンのようでした。それがようやく、1年前頃からコロナ解禁で徐々に観光客が戻ってまいりました。

とは言いましても、観光客の殆どは、お隣のアルゼンチン、パラグアイ、そして地元ブラジルからのマイカー連中が週末や連休には、ドーツと押し寄せましたが、北半球からの観光客は、殆どおりませんでした。

北半球からの観光客が、来るようになったのは、今年になってからで、今年の正月から、日本人もやってくるようにはなりましたがコロナ禍以前に比べますと、3割程度でしょうか！

それでも3年間半と云うものでしたから、それなりに私どもに、希望を持たせてくれてはいます。

ただ気になるのは、日本の円安ですね。日本の人達にとって、ブラジル旅行は、円安にブラジルの物価高昇により、コロナ前の60%程割高になって、いるかもしれません。円高が進むよう祈るばかりです。

頭の痛いのはそればかりではありません。外国からの観光客が徐々にではありますが、滝観光に来伯するようになったので、そこに税務局が目をつけ、6月から動き出し、増税に重税をかけてくるようになりました。

私どもはクスト計算をし、そこに10から15%を利益として上乘せしているのですが、税務局は総収入に対して、30%もの税をかけてきているのです。

これでは誰がどう見ても、商売としては成り立ちません。税務局は何を
考えているのやら？

純益に対しての30%ならばいいとしても、総収入に対して30%も税を
掛けるなんて。

コロナ禍前はバスが4台あったのですが、「バスは車庫に入れておけば
良い」というわけにはいかず、毎週2回、10Kmから20Kmを走らせ
ます。そうしないと、エンジン、タイヤなどが傷んじゃいます。

それで2台を残し、2台は売り払いました。そしたら、税務局はそれ
に対しても、税をかけてきた。仕事もなく、したがって収入もないので、バ
スを売った。それなのに税務署は何をを考えているのやら？

コロナ禍後には依然と比べいろんな事が変わりました。

その中に、キャッシュレスもありますね。

昨年初め、ブラジルではR\$200の新札発行をしましたね。それが
その後新札が、あまり出回ってないようですね。コロナ禍以前は銀行
へ行って、いろんな支払いをしましたが、今では支払いは殆ど、自宅や、
事務所でpixでの支払いが多くなりました。以前なら銀行へ行きますと、
窓口払いで、人の列でしたが、今では銀行へ行きますと、いつもガラ
ガラで、人があまりおりません。S.マーケットへ行きますと、支払
いは、カードとかスマホでの支払いが大分多いようですね。

世の中の移り具合の速さに、80歳の頭では、付いて行くのがしんどい
ですね。皆さんは如何でしょうか？



トルコ共和国のことなど

ジュンジアイ 9期 荒木昭次郎

私がブラジルに移住した二年ほど後に、ブラジル語もカタコトで通じる様になり、知人の紹介でゴヤス州奥のセーレスと云う町に行き測量の仕事をしていました。或る日、セーレス町の新しく拡張する区画の仕事を頼まれ、関係する数人の人達と会って仕事の打ち合わせがあり、現場で一緒に話し合う事になりました。

その人達を紹介されて、最後の人は中年位の人でしたが、彼は「オー、コンテハーネオ」（ブラジル語では同郷人の意）と云って両手で力強く握手をしてくれました。以前に会った事もない人で、見た感じでは東洋人の面影もなく戸惑っていましたが、私は貴方と同じアジアから移民して来たトルコ人で、子供の頃に家族と一緒にブラジルに来て、父や知人から何時もアジアの日本と日本人の事を聞いていて、今日は貴方に会えてとても光栄です、との事でした。

中東のトルコの人がアジア地域の同郷人とは思いつかなかったのですが、アジアとヨーロッパの境地にあるトルコは、中国の先の陸地が繋がっている地を思い出して、トルコも日本と同じアジアの一国だった事を認識し、同郷人として心よく迎えてくれた事をうれしく思いました。

トルコはアジア諸国の西端に位置し、アジアとヨーロッパ各国との物流の通過地域となっていますが、トルコの最大都市イスタンブール市のそばを黒海と地中海を繋ぐボスポラス海峡が国を横断しています。その海峡を通過するのに造られた大きな吊り橋があり、その一カ所は日本の企業が加わって建設しています。

1990年頃にはヨーロッパ、アジア間の交易が増大し、吊り橋を利用してのトラック輸送では間に合わなくなり、2000年に新しく海峡横断鉄道トンネルの建設が決定しました。この工事は2004年に大成建設が請けて工事が始まり、2013年にトンネルが完成しています。

トンネルの総延長は11,8kmの長さで、トルコ人の夢だったアジア大陸とヨーロッパ大陸を結ぶ重要な1本の海底鉄道トンネルの完成を大変喜ばれたそうです。

この工事にはブラジルでサンパウロの地下鉄工事の入札工事で、私も一緒に働いた数名の人達がいまいましたので、その入札に関することを説明してみます。

私が働いていたブラジルの建設会社でしたが、日本の建設会社と共同で、サンパウロの地下鉄工事の1地区をやろうと企画された事がありました。トンネル部は日本の会社が受け持ち、駅と付帯工事はブラジルの会社の担当でした。

二か月ほど後でしたが特殊工作機の日本での制作と輸入工程、それにサントスからの運送、組み立てが最終的に期日に間に会わず、入札の参加を諦めた事がありました。日本から来られた方達はその後日本に帰りましたが、間もなくトルコのボスポラス海峡横断の地下鉄トンネルの工事に行く事になったとのメールがあり、そのトンネル工事に働いたそうです。

1月のニッケイ新聞特別寄稿欄に徳力啓三氏のトルコについての記事がありましたので、記事の一部を以下に要約します。

1890年にトルコの軍艦エルトゥールル号で656人が日本を訪問し、帰国時に台風に遭い遭難沈没して587名が殉職、生存者たちは地元の和歌山県串本町の住民に助けられて手当を受け、その後日本の軍艦2艘で69人が帰国された事でした。

その後1985年にイラン・イラク戦争のさなか、イラクの大統領フセインが、今から48時間以後はイラン上空の全ての飛行機は無差別に撃ち落とす、と発表され、トルコに居た他の国の人々は自国から派遣された特別機で次々と脱出しましたが、日本行きの航空便の都合がつかず、日本人とその家族はテヘラン空港に取り残されてしまいました。

ところが間もなく2機の飛行機が突然やってきて空港に降り立ちました。日本人救出のためにトルコ政府が用意した特別機でした。その為215人の取り残されていた日本人は、警告期限のわずか2時間前に無事出発する事が出来ました。これはトルコが受けたエルトゥールル号事件の恩返しのためトルコ政府から派遣された救援機だったのです。

事件から95年も経っているのに、トルコの人々は明治の日本人が示した真心と献身への感謝を忘れていなかったのです。トルコはモンゴル高原を中心とする遊牧民だった様で、1923年に独立国になりましたが、何時も戦いが続いていて、特にロシアとは十数回戦っていた様で、日本が日露戦争でロシアを負かした事で国を挙げて多いに喜んでいましたそうです。

そんな事などで偶然に会ったトルコ人から同郷人と云われて、アジアの一国の日本を意識するようになりました。

【備考】

この文は楽書倶楽部57号(2021年4月発行)に投稿して掲載されたものを、この会報に投稿して下さったものです。

コンテハーネオのポ語綴りはConterrâneoです。

グーグルマップ(Google Maps)で調べたら、セーレス(Ceres)市はアナポリス(Anápolis)市の北北西にあり、両市間の自動車道による距離は国道BR153を使えば142kmです。



グアリュースの「憩いの園」に住む知人を訪問しました。

8月17日にグアリュース市の「憩いの園」であった日本祭りに妻と一緒にいき、知り合いだった湯浅チズエさんに会い、いろいろ話し合ってきました。彼女は我々青年隊8期生が世話になった石井延兼さんの長女チズエさんで（結婚後に苗字が湯浅に変更）ペロオリゾンテ市の病院に勤め事務理事していたそうですが、今は91歳で7年前から同園に住み車椅子を利用していました。他には異常がなく元気に過ごされていました。

チズエさんと知り合ったのはペロオリゾンテ市に住んで居た当時に、小井沼国光氏の著書「南回歸線の彼方にて」を読んで、ペロオリゾンテ市近郊のモエダ山地の片隅に、我々青年隊8期生が世話になった石井延兼さんが住むファゼンダ・パリャノと云うのがあり、ファゼンダに行く途中に、すごい眺めの良い場所があって「これはスイスの光景にも勝るとも劣らない美しさです」と書かれていまして、それを見て我が家から近い場所にそんな場所があったのかと知り驚き、それから時々途中の絶景を満喫しながら石井さんの農場を訪ねていました。

石井延兼さん（8期生が着伯した時の訓練所長）は、1909年に横浜で生れ、17歳でブラジル移民の父と云われる皇国植民会社社長の水野龍を頼ってブラジルに単身で移住しました。その後日本に行き妻の敏子さんを迎えて戻りブラジルで日系企業に働いていました。妻の敏子さんは農場で採れた粘土を利用して、大きな窯で好きだった陶器の焼き物に夢中だった頃で、ペロ市近郊では女性陶芸家として名前が知られ、毎週十数人のブラジル人に農場で採れた粘土での練り方と加工を教えて一緒に焼いていました。窯開きには、出来たての壺などを手に取って、備前焼きに似てきたなーなどと言って嬉しい顔をしていたのを覚えています。

長女のチズエさんは結婚した湯浅泉さん（ウジミナス製鉄所の創立時代に日本製鉄から派遣されて来られ永住された方だそうです）と結婚して定

年後にベロオリゾンテ市のアパートに住んでいましたが、このモエダ山地に大きな牧場を買って週末を過ごしていましたが、農場に石井さん夫妻も住むようになり、湯浅さんとチズエさんもこの農場に来て過ごしていました。

ブラジルに住む記録映像作家の岡村淳氏が「忘れられない日本人移民」と云う本を書いておられますが、取材と撮影で良く農場を訪ねて来られ、石井延兼さんの事、妻敏子さんの陶芸の事などについて、「時をかける移民・石井敏子さん」の稿で石井家の事を詳しく書かれています。石井延兼さんが亡くなったのは1999年6月で、敏子さんは5年後の2004に亡くなっています。

以下に石井さんが住んで居たファゼンダ・パリャノについて岡村淳さんの「忘れられない日本人移民」 2013年発行の記事から一部転用コピーします。

「石井さんご夫妻の住むファゼンダ・パリャノは、ブラジル内陸のミナス・ジェライス州の中央を走るモエダ山脈の麓にありました。モエダとは硬貨のことで、ずばりこの山から採掘された鉄鉱石が硬貨の原料とされたといいます。そもそもミナス・ジェライスという州名が「さまざまな鉱物」と云った意味で、17世紀から金の採掘が行われて、18世紀にはダイヤモンドの採掘が始まりました。内陸の先住民の土地に多くの山師、そして黒人奴隷が集まり、独自の文化が醸し出されたのです。」

明治生まれの石井夫妻の暮らす農場と家屋は、長女の婿の湯浅泉さんが買ったファゼンダで、パラグアイ戦争で功績のあった軍人が褒章としてミナス・ジェライスに貰った時のままの建物といいます。ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイの連合軍がパラグアイと戦ったこの戦争が終わったのは1870年、明治3年。日本で戊辰戦争が終結した翌年です。例えば日本の山奥で、戊辰戦争で功をなした土族の館にそのまま住み続けている老夫妻、などといったら、そのまま伝記ものの世界になりそうです。」

建物の壁は、野生のタケ類を組んだものに粘土を塗り固めた造りです。窓にはガラスはなく、重厚な木戸が設けてあります。大男の延兼さんはダンディーな人で、髪はポニー・テール、Gパンにデニムのワークシャツ、カウボーイハットといういでたちです。野良のスタイルをしていても、どこかノーブルな雰囲気があります。対照的に小柄な敏子さんは農場の台所を預かっているのです、ふだんはほとんどエプロン姿でした。敏子さんは快活で、いやみではない気品がありました。延兼さんは心臓の手術をしてペースメーカーを入れているとのことでしたが、すでに二人とも80代半ばを過ぎたにしては、お元気そのものに見えました。」

次に石井さんの三女ノブエさんの事ですが、彼女はYMCAに努めていましたが社会主義の洗礼を受けていまして、サンパウロで学生達のブラジル軍事政権に反するグループの運動に加わり、警察に逮捕される人が多くなって、彼女も数回逮捕され、毎回拷問を受けて身の危険を感じていましたが、仲間達のアイデアを利用して、アルゼンチンに逃避、その後チリーに逃避して、最後に日本に亡命と求めて申請しましたが許可が下りず、フランスに亡命しその後フランス人と結婚して住んでいます。私はパリヤノ農場を訪ねた時に偶然にノブエさんが亡命先のフランスからブラジルの両親を訪ねて来られたのに農場で一度会った事がありました。このノブエさんに関する記事は月刊誌「世界」誌に載った村上義雄氏の「日系ブラジル人女性ノブエ・ダラス戦いと流転の日々」に詳しく掲載されているので拝見しました。

今でも良く覚えています、敏子さんが亡くなった事を偶然に知り、近くの小さな教会で葬儀がありましたので妻康子とお別れに行きました。

そこで驚いたのは敏子さんに可愛がられていた大きな愛犬が教会の入口でおとなしく悲しそうに座り込んでいた事です。田舎のファゼンダで長い間一緒に過ごした主人が亡くなり、それを感じて別れに参加していると感じた思い出があります。



橋口陽介幹部の葬儀に出席して

産業開発青年隊同窓会長 鈴木 浩明

令和6年8月15日、終戦記念日のこの日、明石幹部からとある連絡があった。内容は「橋口幹部が急性心筋梗塞で倒れて、救急車で病院に運ばれた。現在人工心肺機能で生きながらえている。」というものであった。

橋口幹部は、私が1年次中央隊の時の、3年次管部隊高等科で、2期、3期に同部屋で、お世話になった。（お世話した時もあった。）

宮崎県、高鍋高校の出身で、柔道部、顔が四角く、ひげ面で、重低音の声が印象の幹部だった。当時は3区隊で、明石、橋口、中別府の九州三羽ガラスであった。

この3区隊に在籍した時には、本当にいろいろなことを、体験させてもらった。特に隠れて飲む酒の話題には、事欠かなかった。

当時、娯楽室で、許可を取って飲酒するときには、ハイニッカの40、ビールは取手付きのジャンボ瓶、日本酒なら剣菱か、七賢、焼酎なら白波であった。しかし、やはり隠れて飲む酒がうまいらしく、幹部たちは、隠れて酒宴を開いていたのであった。

あるとき、鳩狩りが3区隊の中で大流行した。モップの柄を吹矢の筒にし、5寸くぎを吹矢の芯にして新聞広告を円錐形に強く巻き付け、強力な吹矢をつくったのであった。

そして、暇があれば、整備工場や車庫に忍び込み、鳩狩りを行っていたのであった。そして、ある時、幹部たちからさばいた鳩の肉を預からなければならなくなってしまった。

これから、夜の点呼になるから、鈴木が預かっておけというのである。そして、これは、晩酌のつまみだからなど、念押しをされたのであった。

私は、簡単に考え、外水道の上にその鳩の肉を置いてきたのであった。しかし戻ってみると、その大切な鳩の肉は、無くなっていたのであった。

今考えれば、野良猫の絶好のごちそうになったのであった。点呼が終わり、戻ってみると、ものの見事、鳩の肉は、無くなっていたのであった。

自分の頭は、真っ白になり、どのように弁解をすればいいか、必死になって考えていた。しかし無情にも、時間は立ち、幹部たちから「鈴木、鳩の肉はどうした。」と聞かれたのであった。

もうこれは、逃げることはできないと、必死の形相で、幹部に無くなりましたと、正直に答えたのであった。どれほどの時間であっただろうか、幹部たちの罵声に耐えながら、その時間が過ぎるのを、必死に耐えていたのであった。

その後、私は、鳩の代わりに、標的にされ、吹矢から必死に逃げるのであった。ある時、普通に逃げるのでは面白くないから、ぎりぎり、逃げてみると、無茶なことをいうのであった。

そして、数発耐え忍んで、逃げることに成功したが、最後の一発が、頭に刺さったのであった。橋口幹部は、大笑いをし、これで、吹矢ゲームは終了したのであった。

なぜ、鳩狩りがはやったかといえ、鳩を飼うから、鳩を捕まえるということで、車庫のシャッターの上にいる鳩を捕まえようとしたのであったが、埃まみれになりながら必死になり捕まえようとしたが、取り逃がしてしまったのであった。そして、その一件後、誇りまみれになったのが悪かったのか、風疹発祥の第一号に、私になってしまったのであった。そして、寮生活の宿命で、風疹が大蔓延したのであった。

その後、その腹いせなのであろうか、鳩狩りがはやったのであった。このように型にはまらず、遊びを考え、単調な寮生活を、楽しく？過ごすことを考えていた、幹部たちであった。

橋口幹部の経過について話を戻すと、8月19日に心肺機能を外したら、心臓がうごきはじめ、涙を流したということであった。8月27日一般病棟に移動、しかし、8月29日天命を全うしたのであった。

当初、9月1日に葬儀の予定だったが、台風が来襲し、葬儀場所の平塚も、台風の影響を受けたのであった。嵐を呼ぶ男という映画があったが、橋口幹部が呼び寄せたのであろうか。

そして、9月4日11時に十数名の青年隊同窓会関係者が集合し、人前葬が、開始されたのであった。橋口幹部を偲びながら、隊歌斉唱、で開幕されたのであった。明石幹部が橋口幹部の生前の記録を、まとめ、明石幹部の娘さんが、映像に編集したものを披露していただいた。

亡くなる前に、カラオケで、松山千春の歌を橋口幹部が歌っていたのであったが、最後に楽しそうに、苦しいと言っていたのが忘れられない。

その時には、病魔がすでに襲っていたのかもしれないのである。

納棺の時の中別府幹部の惜別の掛け声には、私の涙腺は緩んでしまうのであった。橋口幹部の奥さんも橋口幹部の心情を理解し、最後は笑顔で見送ってくださいとの挨拶であった。橋口幹部も、悪友や、良い後輩たちに囲まれて、穏やかに旅立ってくれたのではないだろうか。

また一人、大切な思い出の先輩が、旅立ってしまった。これも人間の一生、諸行無常であるから、致し方ないのではあるが、一抹のさみしさに佇んでしまうのは、わたしだけであろうか・・・。



橋口幹部の悪友・同窓生・後輩がお別れに集合しました。



出棺の様子です。
みんなで橋口幹部を送り出しました。



残り僅かな人生

サンパウロ 8期 長田譽歳

私は1940年1月1日生まれです。現在84歳と9ヶ月です。

渡伯した隊員は326人でしたが、2012年頃は伝染病の如く次から次へと亡くなって行かれました。1期の大島武平氏が亡くなって、同期の梅原盛義氏が葬儀で見送りましたが、その梅原氏も一ヶ月半後には亡くなられ、忙しい別離でした。

沢山の人が次から次へと亡くなり、今は326名の南青協隊員の内残っている人は100名を切っているだろうと思います。今迄で亡くなった人の中で最高齢は88歳の亀井勇三氏だったと思います。

もう既に90歳を超えた人も何人かいるので、これからは長寿の記録が次から次へと塗り替えられると思います。

それで、惜しまれて亡くなった2人の思い出を記します。

一人はパラナのグアイーラ(Guaíra)に居られた3期の吉村美津男氏の事です。

吉村氏にお会いできた事情は次のとおりです。

私達8期生の田布尾隆雄、吉岡正貫、小山徳、山木源吉と私の5名は、着伯して、一年間の訓練生活を終わり、将来を決める研修旅行では、初めに川下りをするためのボートを作るため、丸太の材木を原始林の中から山焼きで先端が焼けて枯れた直径1メートル位の大木を切り出しました。

一ヶ月位の日曜大工で幅80センチ、長さ6メートル半の船を造り、原始林の中を流れるイヴァイ河より早朝6時に出発して、パラナ川に入り、途中2泊3日の旅程でグアイーラの港に到着しました。

荷物を全て船から上げた頃、兼ねて打ち合わせしていた石井訓練所長と7期の横場幸夫氏と福重豊治氏が、3期の吉村美津男氏と一緒に来てくれました。無事の到着を祝してから、3氏は後を吉村氏にお願いして、イグアスの滝に向け旅立って行きました。その時がグアイーラに住む吉村さんとは初めての出会いでした。

全ての荷物を船から引き上げた後で、吉村氏は「この船はどうするか」と我々に聞いたので、我々の代表の田布尾氏がこの船は十分に我々の為に役立ってくれたので、「この船は吉村先輩に置いて行きます」と言う。

すると吉村氏は直ぐ近くに住む40代の二世の人を連れてきて、この船を買ってくれと頼む。彼はグアイーラのブローカーで日本語もブラジル語も達者ですぐに幾らだと値段を言う、横でその値段を聞いて我々はその金額に驚く。

只の品物がそんなに高値で売れるとは予想外でした。吉村さんは我々にその値段でどうかと尋ねる。我々としたら御の字で良いも悪いも無い。充分ですと答える。その後我々の一人がこの船を何に使うかと尋ねると、二世のブローカーはこの船は安定感が有るので砂取りに充分使えると言われ我々も納得する。

もう正午も過ぎたので食事にしようと言うと、二世のブローカーは何処で食事をするかと吉村さんに聞く、彼が考えていると、日本人の愛ちゃんの所に行けと誘う。ブラジル人の食堂に行くと何処の毛か分からない毛が食事の中に入っているぞと、体たらくを言う。

吉村さんは「皆な腹ぺこだろうから、シュラスカリヤで肉を食べよう」と言われる。我々もこの3日間食事らしい飯を食べていないのでシュラスカリヤに行きたいと思っていました。皆十分な飯を食べて満足した頃に、田布尾氏が私にこの6人分の食費の倍程の金額を吉村さんに渡して「これで支払ってください」と言うよう提案し、私もそれが良いと皆の了解を取る。

吉村さんも今年の薄荷の収穫も終わり、ドラム缶に何本も備蓄しているので問題は無いけれど、田布尾氏が上手に言うと納得してくれました。

十分な食事をしたので、それではセッチ・ケーダスの滝（Salto de Sete Quedas）の見学に行こうと吉村さんが案内する。最初の最大の滝の目の高さの吊橋より滝壺を見た時は、何物も一瞬にして飲み込んでしまう恐ろ

しさを感じて、身が萎縮してしまい、吊橋を渡り切った後では誰も物が言えませんでした。この滝壺の底には得体の知れない魔物がいるように思いました。

後にずっと下流に出来たイタイプ発電所のダムによってこの滝は消滅してしまいました。返す返す残念で成りません。

このセッチ・ケーダスを見学し終わった頃は既に夕暮れ時に成り、吉村さんが夕食に行こうと言われ、今度は「愛ちゃんの食堂」で食べようと誘われました。

その後、我々5人はホテルに入り、吉村さんは自分の農場に帰って行かれました。これが吉村さんとは最初の出会いで最後の出会いになってしまいました。12月23日は吉村さんの命日ですのでご冥福を祈ります。

帰りは、カスカベル市からウムアラマ市までの定期航路の飛行機にしたので、皆で生まれて初めて飛行機に乗りました。

次は7期のロンドリーナの河野勝利氏の思い出です。

河野氏は途轍もない大酒のみでした。しかし私は彼が酒に酔っ払ったのを見た記憶がありません。彼の農場で開催された二回のパラナ集会に行ってお世話になりました。一回目の時は河野氏の奥さんも堅固な様子で大勢の食事を賄い、忙しく働いていました。

その時河野氏は私に長芋の蔓に付いたむかごを30粒程取って分けてもらいました。彼が言うには長さ80センチメートル位の犬の餌の袋に蒔いたら、狭い庭でも充分立派な長芋が育つと言われました。

蒔いて一年目は30センチメートル程の細い種芋が出来ました。翌年その芋をよく肥料の効いた土に蒔いたら立派な長芋が出来ました。その後は毎年長芋作りと種芋作りをしています。今年も既に12本の種芋を蒔いた

ので来年の収穫は間違いありません。私はトロリとしたすり芋が大好きで小さい時から大好物でした。人間の食感は小さい時に決まるようです。

小さい時に美味しいと思ったものは今も美味しいと感じます。一緒に貰ったカンピョウの種は広い土地が必要なので今は絶やしてしまいました。

ロンドリーナのパラナ集会で河野氏の農場での会合の時は既に農業は畳んで、平らな土地をならして野球場のグラウンドとサッカー場のコートを作っていました。野球場の外野部分とサッカー場の全面は芝生を張って、選手の控え室を造り、本格的な球状です。

野球場はロンドリーナの野球チームの球場として貸し出し、サッカー場も地元のチームに貸し出し、使用料を毎月徴収していました。

2人の息子は日本語が随分上手でものおじしない若者で、その改造工事費用は2人の息子が日本に出稼ぎに行って作ったようです。

彼の家の裏側に1ヘクタール位あるかと思われる大木の生えた森があります。その森はどうしたものか分かりませんが、平らな原始林が今もそのまま残されています。多分法令が変わりあの森は、今は切り倒す事は出来ないと思います。

二回目に河野氏の農場でパラナ集会が開かれた時は、前回は元気だった河野氏の奥さんは痴呆症に侵され社会生活は不可能になってしまいました。一日の何時間か、その原始林に落ちる落ち葉を日本式の竹ぼうきで、はき集めて真っ直ぐに等間隔に落ち葉の列を作っていました。まったく意味の無い事を一生懸命毎日しているのです。

一仕事して家に帰ってくる時は額に汗をにじませて戻る。河野氏は椅子に座ってご苦労さんと迎えると奥さんはびよこんと頭を下げる。其れを見て私は悲しく思いました。

3~4年前はあんなに元気だったのに、その変わり様に驚く。河野氏が亡くなって8年になります。多分河野氏の奥さんも河野氏を追う様にして亡くなっただろうと思います。ご冥福を祈ります。

河野氏の晩年はピンガを沢山飲んでいました。我々が河野氏の家で集った時は、酒に酔った姿は見せませんでした。彼は毎日ピンガを一本飲むと言われました。彼は広島市内の生まれで、3歳の頃原爆被害に合い、被爆者手帳を持っていました。

日本の専門医がブラジルに派遣され、パラナでの巡回診察の時、医師から貴方は酒を飲みますかと尋ねられ、彼は「毎日ピンガを2本飲む」と答えると、医者は、其れは少し多いと言われ、1日1本にしてくださいと言われたそうです。これは盆子原氏が通訳兼相談者として医者に付き添った時に聞いた話です。

残り僅かな人生に戻ります。

私は昨年の6月頃両肩と両足の痛みが同時に発症して、医者通いを始めました。何とかして一年近くして治す事が出来ました。治療中医者はこの痛みは脊髄の損傷から来る痛みで完全に治すのは難しいと言われました。

私もその覚悟をして何とかコントロール出来たらよいと思っていました。今は、何とか全ての痛みが取れて、痛み止めの薬も全て止めましたが、痛みは戻って来ないのでほっとしています。その方は解決しましたが、今度は不整脈が発生してしまい、息切れと目眩と動悸が激しくなり医者に行って薬を処方して貰いました。

最初の頃は風呂に入って出て来ると、グルグルと目眩がして意識を失うのではないかと思うくらい激しくなりました。そんな事が今迄5回ほどありました。医者にその事を話すと意識を失った事は無いかと聞かれましたが、それは一度も無いと答えました。

3月1日よりその為の薬を2種類飲んで半年が過ぎました。今は少し良くなった様に思われますが、予断は許されません。今は毎日2キロメートルの散歩をしていますが2キロ歩くのに40分前後で早歩きは出来ません。

私の次女夫婦と三女夫婦と私夫婦の6人で来年日本に行こうと思っていますが、今年いっぱい様子を見て決めようと思っています。

今の私の心境は叩き台に上がったバナナで、幾らと出るか分かりません。
バナナの出発港は台湾台北で、金波・銀波の波乗り越えて、着いた所が門
司港。「さあ買った！ さあ買った！」

【備考】1982年にイタイプ発電所のダムが出来たために水没し、今は見
られなくなったセッチ・ケーダスの滝(Salto de Sete Quedas)の写真です。



多数の滝が見えます

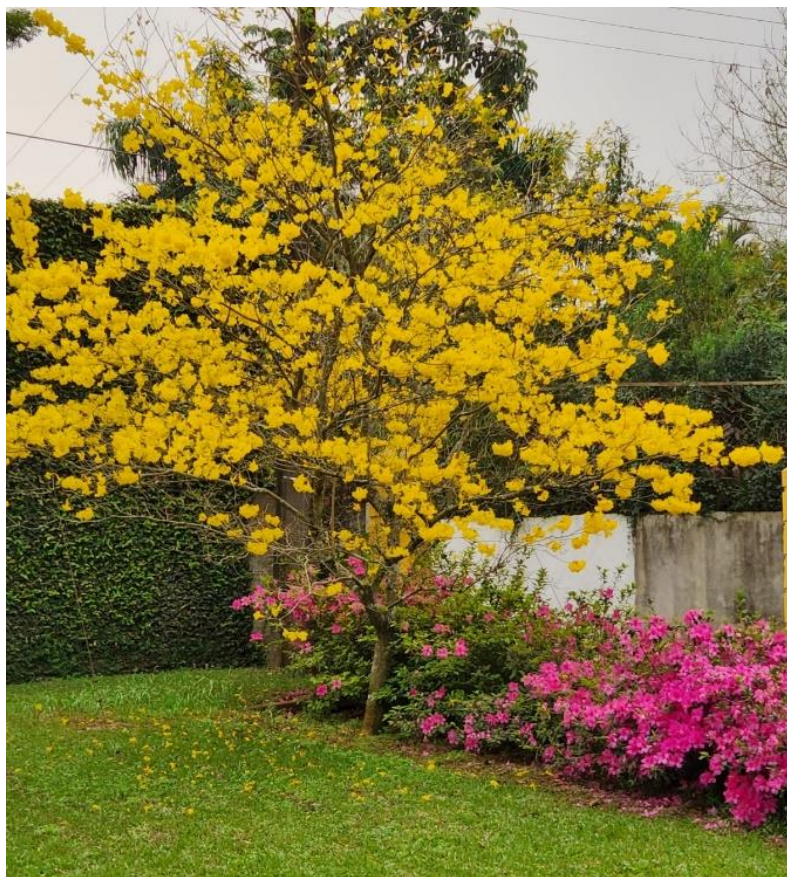


我が家の庭に春が来ました

フォス・ド・イグアスー 単独 齋藤信夫



藤の花です



黄色のイッペーと
ツツジです



白色(手前)と黄色(奥)の2本のイッペーの木で、下にツツジです。
右手前は寄生欄です。



【編集委員メールアドレス、ご連絡用電話番号】

そ が よし なり
曾我義成 ysoga@rimobloco.com.br 事務所(Escritório) 11-4057-2377
携帯(Tel. Celular) 11-97120-0863

ぼんこはらくにひこ
盆子原国彦 kbonkohara@live.jp 自宅(Residência) 11-3721-1127
携帯(Tel. Celular) 11-97431-9994

おさだたかとし
長田譽歳 takatoshi.osada@gmail.com 自宅(Residência) 11-5563-6929

はやかわかずみち
早川量道 kazumichihayakawa43@hotmail.com
携帯(Celular)15-99778-3107

しかたすすむ
志方進 ssshikata@gmail.com 日本では 070-9087-8862

皆様ふるってご投稿ください。ご投稿を受信しましたら、着信通知を発信しておりますが、ご投稿の到着を確認してください。
ご意見、ご提案、お叱りなどもお寄せください。

【お知らせ】

荒木昭次郎さんの住所とメールアドレスは次のとおりです。

住所： RUA MOISES ABAID,155 B202
JARDIM SÃO BENTO
JUNDIAÍ, SP
CEP 13202-500

メアド: Shojiro Araki <arakishojiro@outlook.com>

【次号予定、お願い】

次号は12月上旬に発行予定です。

ご投稿は11月21日(木)までにお問い合わせ致します。

【編集後記】

今号もご投稿をありがとうございました。

皆様どうぞお元気でお過ごしください。